第 4 章　地域日本語活動の実践①―東京都足立区での実践

1．初回 2002 年度　悪戦苦闘したプログラム作成

1984 年、足立区に婦人総合センターが設立され、日本語ボランティアのための養成講座（90 時間の文法講座）が始まった。地域でボランティアがグループをつくり、日本語を教えようとの取り組みは足立区が先駆的であったという。その後、予算等の関係から 90 時間の講座が打ち切られ、2002 年度以降の武蔵野市国際交流協会（MIA）関係者を中心とした講座に切り替わった。足立区から遠距離にある MIA が関与することになったのは、足立区関係者が種々の会合で当時の MIA プログラムコーディネーターである杉澤経子氏（現 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センタープログラムコーディネーター）の話を聞く機会があり、「この人なら良い企画を立ててくれるかもしれない」とアドバイスを求めたことに始まる。

ボランティア入門講座 1 年目は 2002 年度秋に開催され、全 12 回のうち初回と最終回を足立区が担当し、第 3 回から 11 回までを MIA 関係者（杉澤と教育機関および地域日本語教室で活動する河北、宮崎、山辺）が担当した。教室での対等な人間関係構築をテーマに、参加型学習の手法（「部屋の四隅」「フォトランゲージ」「いいとこさがし」）を取り入れ、ワークショップ形式により、受講者同士で考え、話し合い、人間関係づくりを目指すプログラムづくりに腐心した。また、受講者に、地域に密着し、地域の特性を視野に入れた地域日本語教室への展望を持っていただくために、受講者自身が考える地域リソースを使った活動をプログラムに組み込んだ。さらに、筆者らが体験したばかりの、「聴く」姿勢を学ぶエポケー実習を取り入れたが、これは、筆者らが学習途上であり、理解しきれておらず、苦闘した。プログラムには、自分たちの中で腑に落ちたものしか組み入れられないことを学んだが、足立区の方々には申し訳ない苦い経験である。

日本語教育については「国語教育と日本語教育」「学習者からよく出る質問」などを取り上げた。前者では、受講者が母語話者として既知の日本語、学習した「国語」と、外国語としての「日本語」の扱いの違いに触れ、後者では、河北、宮崎、山辺がそれぞれの地域活動で遭遇した事例から外国籍住民の日本語への戸惑いや間違いなどを提示し、その理由などを受講者と共に考え、実際の活動につながるようなプログラムを目指した。本講座終了後に日本語教室「グループあだち」が活動を開始、現在に至っているが、筆者らにとっては嬉しい結実である。

不安や戸惑いを抱える筆者らを力づけ講座の方針に自信を持たせてくれたの

は、足立区が毎回講座終了後に実施した受講者による「ひとこと感想」であった。足立区の配慮で講座ごとにコピーが関係者全員に送られたが、講座内容を再検討し、受講者により適するよう調整するための参考になった。同時に、筆者らのことばを優しく素直に受け入れてくださる受講者たちの受容力と柔軟さが感じられ、逆に人間関係の有り様を学んだ。この柔軟さ、優しさが教室立ち上げの原動力となり、その後の教室運営の活力になっているように思う。「グループあだち」の立ち上げにより、参加型学習の手法を組み入れたプログラムの手ごたえを感じることができた。

2．入門プログラムの変遷と定着

2003 年度は、講座が全 8 回になり、そのうち 3 回を、杉澤を除く上記 3 人が担当した。回数は減ったが、対等な人間関係構築というテーマとワークショップ形式による話し合いを主流とする方針は変えず、参加型学習の手法では「部屋の四隅」「フォトランゲージ」「いいとこさがし」を取り上げた。ただし、地域リソースを考える時間は大幅に削減し、エポケーは扱わなかった。

2004 年度は、NPO 法人国際活動市民中心（CINGA）が講座を仲介することになった。この法人は、日本で暮らす外国人の支援事業を、市民活動として行うことにより、外国人にとって住みやすい日本社会の構築を目指すとともに、日本人市民の多文化共生意識を涵養することを目的とした組織である。これまでの講座メンバー（上記 3 人は CINGA に加入）に CINGA メンバー 2 人が新しく加わり、全 8 回のうち 5 回を担当した。「地域日本語教育の方向と課題について」「地域日本語ボランティアについて日本語教育の視点から／概要」のやや理論的な講座を組み込み、参加型学習の手法に「2 頭のロバ」を加えた。「知っておきたい文法」として、過去、2 年間の経験を基に動詞、形容詞、助詞の 3 品詞を取り上げ、全員参加による KJ 法で分類、話し合いから理解へと学習を進めた。文法など日本語文法事項も講義型ではなく、参加型を採用したのは、知恵を寄せ合い、協力し、話し合い、人間関係を構築していく過程で日本語を客観的に見る目を養いながら、母語話者としてある一定の合意に達することができると考えたからである。この姿勢があれば、また、立ち上げられるであろう日本語教室で遭遇する可能性のある諸問題（日本語だけではなく運営に関しても、他の問題に関しても）にも立ち向かえると考えたからである。

翌 2005 年度は、講座タイトル「地域日本語教育の方向と課題について」が「日本語教育論：国語と日本語の違い」に変更となった。2006 年度からは、上記 5

人が東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターの協働実践研究に参加したため、チーム名を東京外大チームに変更し、後述する長野県上田市へと活動を広げた。「日本語教育論：国語と日本語の違い」は「日本語教育の諸相 VTR、自分の言語史の振り返り」に変更され、初回の役割を担い、「地域日本語ボランティアについて日本語教育の視点から／概要」は総まとめの役割として、また、教室立ち上げに向けて背中を押す役割としてチームの最終回を担うことになった。その間を、3 人が現場を意識したプログラムに従事するという形式が定着していった。また、この年は講座数が 1 回増え、現場により即した講座内容が期待され、現場を知る 3 人が担当した。毎回、講座終了後に新たに教室が誕生していることに力を得、また、それだからこそ現場をさらに視野に入れたプログラムが要請されたわけである。3 人合同講座では身の回りの素材を使ってワークショップ形式で初級文法を考え、現場の様子をより多く伝えるよう配慮した（表 1）。2007 年度も同様のプログラムであった。

2008 年度講座は全 10 回となり、日本語に関する内容の強化が要請され、3 人担当回数が 6 回となった。このうち 3 回を、初級文法を考えるワークショップにあてた。

この間、振り返りの材料であり励みになった「ひとこと感想」を参考に、講座の準備と実施後の感想を E メールで交換・共有してきたが、担当者自身が参加型を実践し対等な関係を築きながら協力し、協働を通して講座を創造してきた。「ひとこと感想」は受講者、足立区の担当者、日本語チームの三者を結び，日本語教室誕生の原動力になっていたように思う。

その陰には、地域の実情に合わせて、講座全体の時間数や内容の方向性を定め、毎回の講座の初回と最終回を担当した足立区の存在がある。地域の実情を知り、そこでの活動について展望を持つコーディネーターが足立区にいたことが、7 年間にわたる講座を実り多いものにしたと言えよう。

3．「グループあだち」「じゃんけんぽん」

2008 年、2009 年に、2002 年度講座後に誕生した教室「グループあだち」と 2007 年度受講者が立ち上げた教室「じゃんけんぽん」を訪問した。共通して流れていたのは柔らかく、和らいだ空気で、場の参加者全員の顔に笑みが見られたことである。前者は長い経験を持ち、ボランティアも入れ替わっているが、変わらぬコンセプト「来るものは拒まず、去るものは追わず」を貫いているという。外国人参加者も入れ替わっているが、絶対数は変わらない。後者は歩み始めたば

かりだが、参加者も増え、うれしい悲鳴と同時に、責任を感じるという。両教室にはコーディネーター的役割を担う女性の存在があり、この人を中心に他のボランティアが自由に意見を出し合い、教室を盛り上げているように見受けられた。また、活動終了後は必ず、短時間でも「振り返り」の時間を取る点も共通していた。お互いへの尊重と対話、協力を重視する参加型の精神が根付いているようで、嬉しい訪問であった。以下に、「グループあだち」で感じたことを記しておきたい。教室には、

①教えることに汲々としているボランティアは見受けられなかった。

②教えられることに、必死の外国人は見受けられなかった。

③グループが小人数で、関係をつくりやすく、おしゃべりが弾んでいた。
おしゃべりの中で、ノートに新しく遭遇した語を丁寧に書き、復唱し、その作業をしながら、途切れることのないおしゃべりを楽しんでいる外国人たちの姿があった。
つまり、おしゃべりの中で日本語学習が進んでいることが窺えた。

④教科書を出しているグループ（外国人 1 人＋日本人 2 人）が 1 つあった。

⑤ボランティアの中にはネクタイ、背広姿で駆けつけた男性が複数いた。
「ここに来るとほっとする」との言葉に、ボランティアにとっても居場所になっていることが感じられた。

ボランティア志望者が地域の日本語教室活動というまったく未知の世界に入るとき、道案内をする者の活動への考え、理念が非常に大きな影響力をもつことを実感し、ボランティア養成講座のあり方を改めて考えさせられた。「グループあだち」は、外国人住民に対し何らかの思いを持つ日本人住民が集まり、話し合うことから活動が始まったが、外国人住民の参加を得て活動の目的はより明確になり、多文化を持つ多様な人たちの集まりはダイナミックに動き出したようである。多文化共生を目指す市民活動の一例がこの教室に見られた。

表 1 の足立区 2006 年度入門研修プログラムにおける「東京外大チーム」の役割を簡単に説明しておきたい。ここでの特徴は、ボランティア活動の基本が日本語支援である点を基軸におきながら、人間関係づくりのアプローチと融合させることを試みた点である。従って、受講者であるボランティア全員に参加型学習の手法を体験してもらうことをねらいとしている。このような体験を通して、参加型学習というものがどのようなものであるかを肌身で実感してもらい、活動のイメージを抱いてもらうためである。コミュニケーション活動によって他者理解が

促進され、またお互いのおしゃべりから共感や感動が生まれることを体験してもらったのである。特に「部屋の四隅」「フォトランゲージ」「2 頭のロバ」の活動体験から受講者が参加することの意味と、そこに集う多様な背景を持ったボランティアが自ら積極的に参加できる仕掛けづくりがどのようなものであるか探求してもらうこともねらいとした。一方で、日本語にかかわる文法体系についても学ぶ機会を盛り込んだ。日本語支援活動ではやはり日本語の言語的知識の必要を感じているボランティアも多い。従来型の知識伝授型ではなく、参加者の母語としての日本語を見つめ、発見できるような活動型学習方法を取り入れた。講師主導型の進行によらない協働型の運営を試みたのである。あくまでも「教師」「学生」という上下の関係で講義が進まぬよう、全体の進行そのものの工夫や講師のファシリテーション力の一例が明示できるよう計画したのである。

表 1　足立区 2006 年度入門研修プログラム

<table>
<tr><th>回</th><th>講　師</th><th>テーマ</th><th>学習内容</th></tr>
<tr><td rowspan="2">1</td><td>多文化共生担当</td><td colspan="2">日本語ボランティア支援講座の主旨および、足立区の多文化共生施策について</td></tr>
<tr><td>足立区内在住外国人（3 ～ 4 人）コーディネーター</td><td>足立区に於ける在住外国人の現状について
「日本の生活で困ったこと、私の日本語学習」</td><td>足立区在住外国人からの問題提起とディスカッション
在住外国人の現状を把握し、ボランティア支援の必要性を促す</td></tr>
<tr><td>2</td><td>東京外大チーム
（CINGA 日本語チーム）</td><td>多文化共生社会と地域日本語教育～その醍醐味と可能性～</td><td rowspan="4">多文化社会に対応した日本語教育や支援の在り方について共に考える
いいとこさがし～人間関係づくりアプローチ

外国人に対し最低限知っておきたい日本語を教える技術の基本を学ぶ
［1］参加型学習の手法：部屋の四隅
知っておきたい文法：形容詞
［2］参加型学習の手法：フォトランゲージ
知っておきたい文法：動詞
［3］参加型学習の手法：2 頭のロバ
知っておきたい文法：助詞</td></tr>
<tr><td>3</td><td>東京外大チーム
（CINGA 日本語チーム）</td><td>日本語ボランティアの活動［1］</td></tr>
<tr><td>4</td><td>東京外大チーム
（CINGA 日本語チーム）</td><td>日本語ボランティアの活動［2］</td></tr>
<tr><td>5</td><td>東京外大チーム
（CINGA 日本語チーム）</td><td>日本語ボランティアの活動［3］</td></tr>
<tr><td>6</td><td>東京外大チーム
（CINGA 日本語チーム</td><td>日本語ボランテイアの活動［4］</td><td>身の回りの素材を使って初級文法を考える（身の回りには使えるものがいっぱい）</td></tr>
<tr><td>7</td><td>東京外大チーム
（CINGA 日本語チーム）</td><td>日本語教授法としての参加型学習</td><td>地域の日本語ボランティアに期待される教授法
・グループディスカッション</td></tr>
<tr><td rowspan="2">8</td><td>先輩ボランティアコーディネーター</td><td>地域の日本語ボランティア活動の実践に向けて</td><td>終了後のボランティア活動実践に向けて話合い
・地域ネットワーク
・具体的な活動に向けてのディスカッション
・グループ立ち上げ、実践活動に向けて</td></tr>
<tr><td>多文化共生担当</td><td colspan="2">日本語ボランティアグループ活動への期待</td></tr>
</table>

4．ステップアップ講座

2007 年度、足立区から入門講座を終了し、教室を立ち上げたボランティアたちからの要請に基づきステップアップ講座の依頼があった。何が期待され、求められているのかを知るため、講座プログラム作成の前に事前調査として教室活動中のボランティアに課題などを問うアンケート実施を区に依頼した。得られた 29 通の回答を集計し、分析した結果、大きく以下の 4 点に分類された。①活動形態（マンツーマンやグループのことなど）、②ボランティア問題（人材不足や運営のことなど）、③学習者との関わり（文化や生活相談など）、④日本語の学習面（敬語、漢字、助詞など）である。全 4 回の講座は、最終回を区が担当し、3 回を 3 人が分担したが、各回で課題を取り上げ、参加者間の情報交換、意見交換が進むよう、参加型の姿勢を重視したワークショップ形式の講座を組み立てた。

2008 年度にも同様の依頼を受けたが、同じ受講者が参加する可能性があるため、プログラムを新しく組み直した（表 2）。ただし、受講者同士が意見や知恵を共有し、関係をつくっていく場とする参加型に立脚したコンセプトは変わらない。プログラムは「事例から学ぶ」「日本語教室の課題から」の 2 本立てにし、毎回、アイスブレーキングに現場で使えるような参加型学習の手法を取り入れた。ステップアップ講座でも「ひとこと感想」が書かれたが、互いの情報や意見交換による学びあいの重要性を認め、手法を受講者が積極的に楽しみ、実際の活動に使いたいという声が多く見られた。

次頁の表 2 は、足立区ステップアップ講座の 2007 年度と 2008 年度を並列に示したものである。各年東京外大チームは 3 回担当した。両年の特徴は、やはり講座内容自体を参加型活動を中心に据えて、ディスカッションや意見交換に発展させた点である。常に受講者からの意見の発信やお互いの意見交換を重視し、あくまでも人間関係づくりのアプローチを貫いた点がその特徴に挙げられる。受講者は新たな手法を学ぶとともに、ボランティア活動における課題を発見しその解決に向けての方策が見つけられるよう全体の進行の構成を企画したのである。

表 2　足立区 2007 年度・2008 年度ステップアップ講座

	2007 年度		2008 年度	
	担当	内容	担当	内容
1	東京外大チーム （CINGA 日本語チーム）	「ネットワークから学ぶ」 ボランティアのネットワーク図／中上級者との会話	東京外大チーム （CINGA 日本語チーム）	アイスブレーキング「わたしの 4 つの顔」 事例から学ぶ・課題から話し合う ①地域社会と日本語 ②日本語教室の課題から―定着しない学習者―
2	東京外大チーム （CINGA 日本語チーム）	「レヌカから学ぶ」 ゼロレベル	東京外大チーム （CINGA 日本語チーム）	アイスブレーキング「ランキング」 事例から学ぶ・課題から話し合う ①子どもと日本語 ②日本語教室の課題から―教材と使い方―
3	東京外大チーム （CINGA 日本語チーム）	「宝ものから学ぶ」 レベル差	東京外大チーム （CINGA 日本語チーム）	アイスブレーキング「人間マップ～時空を超えて」 事例から学ぶ・課題から話し合う ①職場と日本語 ②日本語教室の課題から―定着しないボランティア―
4	足立区担当者		足立区担当者	